

50

45

40

35

小精廬日記
昭和十一年
十一月以降

特別
14
1919
625



小村庵日記

昭和十二年十一月八日

十一月

一日

日

時日本書院より龍蔵（アキラカ）、あゆ三博士（ミツシロウ）を寄
す。白鳥省吾は解剖中、達也の解剖の過程
一一看と郵送す。板口勲（ボウコウ）が間う、隨筆集の
稿と併せ時と慶祝（セイジク）。十一時先と伴々散策
不冬の風日呂（ヨコロ）をゆく。

二日

晴風朝未難時辰至赤穂と越後大印月軍西
即次男候時多金也二十一市圓主之ん、故待物
利2.日本勅業社りと未ひ農工社りと全得
3つき株主合ひと御書利2.まう(内子)内付
高嶺扇毛沙之屋千の失財と薄小田舎
坐て候。1.白鳥有音ノ間ち、才一均の頃
全百圓引生す、石乃三重等々、候該候納の日を
角六家か赤会り2.四日と定め、不承あるの然
内安古推く行候。朴く書。乙未大行、壬午

権原製

罪證空論王画

三日

明治年

時今相立時皆追迫り地震甚く山川流に來物
都移支々と土田附金利未、高嶺扇毛に候納
品を贈り、隨分ええ吹刃刀を拂ひ、紋鎧の
模の左腰袋一女武流毛得、新舟八三福元
候。1.甲子、候御品一其事世下件一百圓、記額
書家於吉日録其一式石保す、為持造

四日

時、時事報者大道三印見合國考院も
竹下一時間許訴す、元々伴を殺東白木加く拘と
辯ひ其立派に酒飯一時間飲牛睡深更
力角舌不協を締約式終り、始傍の日を
升九日ニ定めりと雪報列々

五日

此朝未詔筆の稿を終り、正午より上町
午後散策未終生也少くとも山田川西之

棟原製

間す、城内下婢毛利柿二傳利未、森一兵
三返上士殺毛利佐助の柳川春三の職を譲る

六日

味、日本回支貿易協会旅館十二月葬川原
稻穀主義、左近乃右衛門より簡文住友支店
予預金二百五十圓ノ生支、山田川政文、山田吉
作子訪、由石源先達始の日を電報(先方と
折衝せしもの)、而昇曼陀羅の運而
是す、聯合支那回支總理有岡村春三有耳
幼年七月葬、寄稿をもとひ、丹美原

おとと日も十一時先づ付生御賀生申て飯
一とゆく。文三事の清子を送り。之より又可及
確。此文在高田と寄り居り。夕時紅葉故の體
合に歸り。今夜睡合餘香。松本耕春伯公乃
高田の吉寿と祝す。種々特別の御宴會。
自外、寡席と遥と呴ひて飲吸と舞。七、緋絨鞠
もとま縫う。席の新秋の日本庭園も今更
絶出度。高田、余、松平、田下、曾田井上森如何
八人也。高綱芳舟印と來音山と萬を寄
七日。

樺原

七日

而今九時。移梁帝國。遼。成吉思汗の護
王。武。根さん。行。朝未。龍德。年
二十六。至。金。都。北。漢。東。栗。清。金。白。鳥。者
去。來。往。南。鳥。多。又。其。詩。日。作。私。傳。記。于。那
多。十一。時。散。策。而。又。遇。之。高。峰。危。巒。雲
霞。之。烟。彷。彿。仲。是。向。未。書。手。之。搜。稿
と。收。集。之。書。疏。學。旋。經。利。之。高。綱。芳。舟。印。中
此。而。色。是。萬。丹。吳。黃。東。云。教。万。角。合。喜
三次。之。緣。故。の。手。續。才。了。之。考。之。也。也。

八日

日

哈、日本聯合會年會於此年十二月三十日之
自此の一稿を寄す。井上底丸より然在候論
を取次り雜誌を寄す。前日ヨリツキ
降子と皆うまく相手伯と讀み是を觀よ。則
連十一時半と散未焉。先二金を賄い新宿
の三福に酒飯す。相手伯、酒もとなり、及
口獻未承所、未だは睡魔を得ず、白鳥省吾
の清心苑詩記を讀む。

九日

哈、東洋貿易、訪華大出使部創立之十
ニ擇一候。代立る因ね未だ、此月軍事四
府家後皆うつて難一節切手十四三枚よ
り生す。石場より其紛角谷家と納結不刻レ
の経過を報矣。先を伴ひ新堂啟業、元御
木本庄三郎丸の指輪を贈り資生堂より
午後一時半、金主の因ね一時半文左一郎
せ入高金五十四えり。預金、此五角谷を候
武昌にて未定、及口獻未こ枝商小不量能

書物皆行名紙の圖案を持ち未だ、追筆の稿を附せ
て又刻一列より、總骨董店にて余の後札の骨董洋
人の銀川新穎作三花の式一通ナ来り。

十日

晴。朝未既装不用奉手印ニ附せべき事と於
此で改口獻吉承取、山林豈能七疋生利
?、大公今北紙引領社と押真毛太翁由
是、往友鶴の支店より預金万円ナ用引先又洋裝
不用奉手印ヨのキニ研御色西川三代取扱を

樺原製

馬文鹿未八雨

十一日

雨、朝未洋裝不用奉手印ニ附せべき事と於
此二百六十行、毛口取ノ除之尤同件上印粘合
軒を活生廿三〇絞締、次日所じ奉付窓内
を開く件えどと在り、亦今之ニ神殿式傷等
と餘今風日ニ於レセ也、故乃吉田初里
ノ御本景正野子春之森一景、毛口奉付山崎
堂次中之江島仙翁等諸君、酒食實詣御

主じの波天皇と朝鮮の人にとも賜ひ奉る。揮毫を敬
紙成し、絵師式披露於飲カード印刷を今代
一依頼。電話料十七回三十九元納付。

十一日

時、細川信吉尼森森森道主酒、印を取め、羅鉢
の大根を茶室で食し、納戸に移り入る。高山幸政印
と七種の字の書を呈す。御堂金并大工事
の事、内修繕を終る。十三日早大法事、御大會
の事、未だ午後数時未だじル宵並店、鐵

印一碰形古燭台一を購ふを極之

十二日

時、印刷所にてお待、此の件よりは社員集ひ、印刷
済む。未だ十二月雪紅豆飯を振る。洋装
不用本細川、引渡す。永井柳太郎より酒を乞
福在處一定年間用ひうどと持參照定を
といふ事、龜山市にて既て未だ、十一時浅谷
の旅館に赴き、複数の主従の因公改列を
見る。前一時津若全の二矢吹夫婦と午後と

此より元も因席、矢吹と祝酒明二元年卯年
二十四日卯未、大坂太閤宮奉納并石竟を御
創る

十四日

始、因朝大千死云(まが式十寺。多喜寺也)、
間す十七、故美濃守道博不集、出来事も未ひ、
隨筆中圓獻錄原稿一束白鳥有吉
元小室(元美)、三重暖翁式内里鳴神社
社司近藤春臣(春臣)全の件立毛も需の

標原製

未ニ十一時元と伴官叢葉、竹馬にゆけゆう
舟是處示らじ又云、佐助太宰(代印刷成
リ大半郵送一終)、矢吹宮ニ一上立看、升古の比
谷陶(立)三枚を東京寄付、當我時行得其生
の三五今、折り。及來之

十五日

日

岐、朝未お待物十枚通(暮)まし山縣春臣又
投宿、角谷の家旅(向日)童三友の書帶を用ひ
お二モ白朱(白)天ソ出(出)あ、権右(左)

直方紙并白扇七組角谷觀送^ス筆一枝
角谷(新之)にし即而候時^リ是元年正月廿九日
大工手入^スト^クガラス陽子^{ミツル}又簡易の事
所セ心^スナ^シ午時日本橋甚^タ衛^ミ哨^シを向^ク向^カ白
鳥南至^ス而^シ午後杉本喜^{アキ}井邊春^{ヒロ}重^シ
祝^シ者^ト乃^ハ杉本喜^{アキ}井邊春^{ヒロ}三古
角谷^{アタマ}あ^シモ^シ一間^スも^シ角谷
未^シ三次^ス未^シ書^シ山陽^シ移^シ化^シも山陽美術
展覽會^シ金帖^シと^シモ^シ正^シ京都便利^シよ^シ
般^シ紫^シ牛^シ葉^シ字^シ四^シ京^シ山^シ寺^シ未^シ京都^シ西國^シ出^シ詔^シ

櫻原製

卷之六

十六日

所^シ月四日甲(新秋)增田義^二、吉住善^三と桂霞
令^シ出^シ席^シ詔^シ、差^シ到^シ、法政^シ身^シ以^シ其
手^シ詔^シ、と^シ未^シ改^シ其^シ未^シ、前^シ、白木^シ
り下^シ手^シ持^シ念^シ其^シ未^シ紙^シ詔^シ、御^シて^シゆ^シ、
御^シ手^シ詔^シ其^シ未^シ、十數^シ年^シ紙^シ詔^シ今^シ今^シ
詔^シ未^シ、本^シ年^シ其^シ未^シ御^シ仕^シと^シ未^シ御^シ志^シと^シ提^シ
生^シ未^シ在^シ小^シ手^シ紙^シ詔^シ未^シ考^シ字^シ解^シ

説を後當時已移す、山田也已とし奉る。

十七日

時日本御事あり、附南金づきを些少持ります。
十二月六日關府汎秀寅辰五時午前の如
合に吉田半舟も松之子白鳥有吉も来て、全弓
五十日住支拂ひを預金引出す、角谷もせり。羽入
東を報一未2、阪上山花も注射を多く、至達市
通田先生病、全十日为甚を送り島津因の注文
を了す、多羅朝日许多ノ記高白最良次ナリ。寺訪

棟原製

テノ回心後を景記一と三つ午後吉田ナミシテ
高祝物主携くも未正(難局初年正丁酉)不承貢
能重來、土時西郷主中將方代か五日を留ま
り、其集ニ詔ち立向もと祝名利来

十八日

時朝未誰知正直す、早大伊志東西文多郎
吉江春竹もと同え多利作満十五日、總合聲
(キムシ)余の事、前を拂ひ多政界往來未、勘
利小林以三事の成行を、其詳仕の件、付来詔

十一時散策。船中より出でて、大吹男東洋の
ヨリキ塔儀の打合と多く時計をもあつた。ぬ人仕事
部屋未だ白鳳住處り未だ。

十九日

雨。早朝市立役者あり。天尾昇等に迎見を終り
来々室家井上辰巳よりまの未人と接客
をもく。翠原の今ト一来。白鳥有考。隨筆
の原稿一通を寄り。ねはに生部。臺かと考
え。因モ幼秋也の部の内陣につき未だ不深

ミラミ未届。夜久一らも御本大トトノトイ全

集日記の部を寄せ来る。午後散策。古玩を
縛りえり焉ラシジの禮。書を繰り、古物鑑
治も味嘗。波一格を寄せる。

二十日

晴。今朝角谷母子到着。よへき先上理野三郎
久吉彦鏡二点。久一等。同上。移泊。雨未だ
り祝寿利未。白木庵主を祝す。一色柳相を贈
う。二三本客あんじえ少う。まし。浮城ノ元

遇合す。宗家を祝別出来、細川公庵も不
用本多代全四十両七十両入飲酒内奉
人完と重政と文也、三美所有秋の物尾法浮
錦山の堤防破壊死傷千餘名の如きの都
より生づましの祝あわせ一月も、准吉を刻以
長尺の杖を與ふ、石像三面を御供。金洋も
鳥屋圓利連少之江成一枝口獻支毛を祝
あを定め。新に栗林も果地一畝利
未、今丸六吹あと光前公を益為三筋い傍駒の
并合を算す。深更にコタロキ二床、歌酒を飲む

十二時後

二十一日

此、今相九時内在久光と麻布の卯ノ江の
内、あはれ身健康薄らず、合計不振のため
度總の而手足、手か家の往時後毛體
被蟲なる事有り、十三日と舉毛と作義
澄有り、ゆゑに之をもと難翁二首、其答
仙と島夢利未故和田意吉三肉思つて
あ一物を守る事ある、元祐毛と作、寺久のため

計く、午後二時角谷母子は納品式殿代の着
前代千田(宣義)外、記入の祝酒持て来ふや
所處一祝酒を高木一美、五時毛利三郎西本
ゆき日家の佐賀富、臨む、角谷母子に附人らと
響ひま、五十島旗也と祝酒(羽二重)彷彿行
まじか同新丹吳(も)ね白の羽二重別来

二十二日

日

所、今朝起と伴り枝宜より引も葉もそ
注え代全里田ぬるる五指(さき)の申

約十三枚猪込入る十日拂ひ先母第一三十
日拂、御せのが不手口嘗て賜る和田辰
大(おお)久(ひさ)、牛(うし)と牛(うし)中(なか)角
谷五三次(ごさんしせ)と貯(たま)すれど前まづ礼状ある
今朝来新宿宿(すみゆき)ありの熱(あつ)伊月(いづき)毛利(毛利)をし
法事せしむ、彼の前も承認人を儀(ぎ)も終日
庭園(ていえん)掃除(そうり)ても

二十二日

新宿(すみゆき)

西風(せいふう)と北高(きたたか)半(はん)身(み)を着(き)、真(ま)

私品移地川未、坂口在城和五手傳之未、佐恭
信丸馬頭鏡也利。上總一時形見也利。元時
吉神前、此約在正月某時刻前新郎の父為
式ノ参列者双方既數十三人、式終つも高座席
ノ席取を當り入難物と考す。空刻又時々乃
ち少少強度の寒暖附り、未參合御高士其事
宗家夫人去住杉木久美人牛上庄九十九丈の元夫人
少江原一寺三十名立時子細言、夫少少其事
（一七八）江主事を経て、清江を守る事四社
近ヘ、清江を搬運、一時計雜役の役是病殊の

支那事變之來日 楊子雲
其後又為甚各所見也 視電

二十一

唐安西善淨寺尋儀廿八日
至嘉州^一尋記本覺寺住
石碑^二缺全七石因以出生
角今未歸白豚次
亦尚何不相與^三此之至酒半留
半食未^四其食未
初春新綠幼毫^五方七十
一日拂曉^六神鈞微寒
對數數^七自公^八也多日
欲數行而

八月二十日 伊月を起きて午後とまく、室母有度
の弟の事あり今夜予の家に宿す。御比奈貞一
北東糸写謹、成吉ハシアレットを寄もあき。
角谷政次郎、れ喜モ三底近ノ

二十九日

岐村島猪雄の訃利公、吊悼客報ともなし
おひこをもむとがく、下林貞能、角谷紀代
大主の肩に車出、丸山の物を縫ひ、又
宮崎尾に支伏五代、交換と縫ふ、あの美
安牛糸縫、持參の縫、否と縫い、古川

居合を二箇、一中をゆく、矢吹東洋、大坂
朝日りきとも抱葉の害ある事の外、あ
田保美社を立田奉儀の次才ひとまず来る、
西村文則と雅治、东洋趣味、寄附とくとの事、
金三万三十円家用内予ニ六人討、丹具の原正出立
を教へ、未入高尾也龍、一家家も、自称、雅子
と號す、寛後十時外、相面暮も、未だに別す
る、猶候約の大体をうじオの放正、也種く

古今御先口傳雖少者可取，以矣。今朝
正統乙未撰授一謝儀而曰白繪面一枚也。號
曰丕曰書作於海之方。多有石刻。日後亦可
求之。立至一校之授無。東洋故味
校之。及隨著起稿。序易改。獻玉并
南谷記族云木在南。是其本也。延年月未
洽。半後丹吳原平。來訪。多時後始
後移居三宿。到。此客。其。鑒。時。令
公。多。一。因。紅。葉。作。主。上。多。根。均。之。集。
杭州。十二月七日

二十七日

晚收口獻。言。前。夜。次。于。一。未。間。跋。渡。北。一
即。乞。物。之。界。向。都。宣。之。从。外。跋。押
臺。並。持。万。大。一。枚。之。共。不。完。主。不。保
三。夕。老。以。礼。之。多。用。能。負。充。立。十。日
为。持。者。今。夜。半。大。三。丈。全。一。先。輩。接。友。之。人。
陶。之。事。之。根。之。人。以。之。差。之。生。下。折。之。半。晴
移。之。大。到。南。之。余。一。元。之。光。之。敬。果。如。生。二。晴
日。恩。以。去。之。策。之。未。定。分。之。美。泰。京。書。首。院。八

勝田主二郎 十本入半巻と詰り未の

二十八日

時、安田長次より奉傷あつて、早朝人を候ひ
者一毫も賜ひ、伴純ひらも出来ず。乃ち
テハ解少を候らず、敗戦を蒙るに手ほどき
内儀も、雪の朝一宿を連坐も大改御事の
嘱しき。今朝抜郵、日本郵船も立合の
處も全く無く、大吹有三支のも詔と利す。名
古屋五日到着所、東丸谷にて此の嘱と並べ小

物を拝上覺もし投す。午後は亦北本龍寺に赴
き、安田長次より告別式。臨む、余も一時間
以待主令奉。未一萬二十と注セし、不将
まゆるを承之。

二十九日

日

此日打壯ニ仰す事少ぬえぬゆうの如きと接
接主を深めたり報矣とす。然候事へ
照應勘定をさ一千九百九十九円八分、尚
公差し次もあら別々村山秋浦写外

夏目支度事あふ、十時迄主膳のうちまを臺の
矢吹久の臺を底し、引居の矢吹久新支度
三酒令とてゆへる、角公主余紀親王と別する
脇りお文ニミスカトとある、片持者用社掛板附
左の如し

一

内序

四月廿四日

式年祭奉書

四月廿四日

式年祭奉書

西月廿四日

式年祭奉書

ニ月廿四日

式年祭奉書

百四

矢吹久新支度

四月廿四日

矢吹久新支度

百五十四

矢吹久新支度

七月廿四日

矢吹久新支度

八月廿四日

矢吹久新支度

九月廿四日

矢吹久新支度

吉原

三十九日

臺所添付書

る因

佐納サ代

千百日

白木屋傳

火の事

火事

新内式前二段にあがへ立あう事より被宿は病丈
夜も馬鹿に新き寒母看護師りに及ぶ医の
の診あらまの師患漸々深かに恐く三四復あが
べくもんと此後坊丸風を近へまく舟さへ一歎
をねず。尋す。

橋原製

三十日

皆夏目先片尾湛井耳沙夏日(さなづ)の
墨鏡片尾底三彩の墨と高らし末、鏡元
を求ひ、自不心勘定のり六百をす日小切手を
あ行、丹先處手す手詮、尤じるよ骨董を
述う様並合む酒飲むしやう午後又えと付
み日本橋之役事

十二月

一日

所、白鳥省吾、潤太中、角谷勝次、井上通之
五人とも手書、入舟崎に一處と未だ。故某左
ビルヨウ内閣主事室給の一本と朝鮮公使館給の
一枚と摩鹿洋艦授於老校也。珠參也
北使四十上國也。下公の凡月三日
瑞貴益銘ニシテ音儀部のゆゑを贈
セゆく。丹共の席中。事例、三男之禮三回作
早稲田大学生同部創立五十周年紀念之銀
製スブーンサ打賜うる。大日本印制合社況
十八日通知到。丹共は難の納屋奏さ

贈うる。

二日

吹、泰東吉毛俊と余り麻核の校今と赤身
玉一段と毛毛。間不りと來る。家什目次
そむり一箇年ニ西里登程、不滿も。矢吹
夫夷行脚、房裏不滿三本。矢吹もと
の母と今後、行脚の實家にゆく。度量
克もとを擲譲す。矢吹支給と午前と丸
三時と申す。おとと為六百圓主務、大坂朝

日暮に来書。略傳近體詩編凡十首。又
小乞青主。

三日

岐山田舎も手も復かむ今本紀事算芳知手
高田野々草。板の故友を結婚の際引甘酒を飲む
呉門を終る朝未踏布車。至るを松井村。
御車用二弓於許の音和漸せく成り、白鳥
之枝部、故三木三仙。构を織り古峰庵にて
三日を過ぐ。半後所の未亡人承物事の

標原製

殊私の後おふ。酒伊予十四郎も。伊月未珍
病婦。緑代も新あ。昂室増采をるハナ酒因
昂三元。乞拂済。主翁春社も。未。因吉曾
協念不寄。了隨筆の枝心揚糸支。

四日

吹。國吉鉢。於絶くの寄宿棧心揚一枝山
上投郎。以御病狀。うき。角谷亮三次。并
及口。就支。吉林。乞寄。五十。將被。也。而祝
のあを。野。免。山。素。三。馬。山。陽。者。喜。幅

三月五日
此處處處皆是三宿堂の書院。余は隨事
を致し、出假部も實業も三十日餘り、平穎田
書院にて、委員會も十一日の四回、平穎田
と御品の附と為し、午後散策東丸山スル
李羽の底砂花瓶と雖、價廿五圓也。段口
試走車と見、神戸市立圖書館を國立
用紙と定め、一開銀二十五圓耳。但金
一セ、精良一化路踏送礼送ル物と認ム。今來
以月軍事所、紅葉館に於く。是大好手
斧古事記と共に

五日

西白馬府主、濱洋壽三中日本素
詠り、竹條園主七ツノミト未吉、中陀欽
流主と被拘を終る。竹條園主は難船事件
よりの實母を失ひ、一旦は圓更に上京と決
十一時先主付て家を出で大ビルの外
着い、同府主の事の別荘に於て行
事主曰くおまんづが蟹井の主也。大
其一令主、大船主も尾崎行修入未

つにあづけ一ぐれえまき 尾崎耳代耳
手撰抄も紙に紹じて示す、尾崎は校友の
忠一平と私股を主に書く。少刻圓音の
著、年日ちぬ：ゆくえ一回自動車より香
實在、赴く、長門以東土名令合あきりのと
其の内海へ竟かねえんじてあらわせたる
一月の生鐵五百石、紀念損耗三百石又
席上押立毛、喜田の荷物と辰起。一帆船
の輸送と竟か八時半迄車玉セ也全セ此
く、高の山と蛇洋の邊に月吐鷗回

一橋を過ぎて加藤八十三歳 尾崎七十六歳
大正二年正月三日セテ之歿也

上日

日

所、吉田秀人らと美濃十四日錦丸に就く。
正心をのぞめぬ可りありあとがき、青幅二
匹ニ包四百束、在野の役に就たしも
さ枝木、白鳥竹篠田に養ふ、長弓の互尊ニ文
庫創設者暨本恭ハ即死云うべき吊状
を寄與、午後数葉の毛絨羅を奉
す。

七日

此時執事の所行に引つき、着化正午と
脱衣三者坐の禮序事等三部先奉る。左の
内枝口上獻太也二も(内事色引)。植木觀
二人引う庭樹の手入をうち、植木觀
般後始式の折の字を教於是ノ事。半
経先と鉢等ニ物を拂ひ、中陀鉢次方へ差
札とも縮縫の凡呂委玉無事。安西堡
社ノ不破善次未り其同人今志、予の高祖
行ゆこきう。正時とね葉松ミ赴く。睦同人。

穠原製

と共に甲被の久都又吉山口行坐あて故鄉
と主ふと振うる。斯う事は予の同族と五十年
間傳承とす。初めことと也。

八日

此朝未だ朝モ養本山の内也。身湯多時詔と
あえ御内枝口上獻太也(内事色引)。左の信
のる、白鳥外神代ス板(内事)。縣勝銘ハ房
尾原村白鳥(郵送)。午後船吐散策東半
大出假部廿二。終日も通じ可も、合當而原自

利の爲めに長治中寒流後金朝改土持て未
至

九日

さうの母今朝りに来着、早大へ書面を
出候の迄候古物、と松山色紙二枚相手角谷
妻三歳も未だ茶所もと身も立たぬ列々之
を身につけまつれむ(ヨリ)、より酒を飲
ふ。うちで修のと注の横川二尾川
角川を島に、りゆの心清方にて是を説示す。

標原製

ちう、良田一組母十三歳忌よりおぞみ奉
手大納戻五名の湯利、御内通奉ら梨安
美布、滿鉢大利未

十日

宮内來し玉石田柴の小品相を優茅の小骨
蓋約百疋セ取り別け一組に納め紛糾ニ備
英市の後悔向忍給付にて退位の懲戒すと生す
ふと到り、昨年九月記す。世界の注目を惹く御
係那人シニアサンニシ未回の年若怪人也。固丁

二天引つゝき三番及早大書道展へ陳列の古家
花岳九點値符付丹異座あらま妻之午後
散策、東光吉居處もさう斐りし金の施設、
賛せまべき印収入三千、全の捺印を永の毎日、
井に由れ南へ出收編の沙原とよしと大隈長
徳年高行津川塙引二尾がおもむ

十一日

此天の御守は編美事やうの英文、大日本北海道
那伊御御歌、此年は既ニ倍す、余の心北海

道行乞勧の文ひねりてかう、園丁二人引つゝ
来、ひるの徑四條引代十面内為附身
送、而内方而引至終添全音利可
十一時引筋、散策三福、北海道、
後前崎紀念池、郡郵便局、行井、
印と白玉、總ひ水の手筋、捨井の上
三千千枚の印紙と少數函を東光吉あらま
送、あ回家近孔と白緞一匹引來、應来
兩す

十一

卷之三

卷之三

五

所為之文。相來傳至。之極矣。沒後。其
早行大是。多是。予之。與。其。年。之。
改。口。獻。大。有。少。而。家。文。化。協。公。之。中。持。董。
去。村。多。有。少。可。以。也。利。車。東。大。有。圓。
史。主。將。之。空。田。保。善。社。不。破。其。業。并。今。
固。不。有。亦。西。美。之。之。就。之。的。東。而。而。
送。小。木。儀。之。之。送。也。甚。也。但。村。送。二。又。祝。約。

さう高ちえ筆を謝り之禮品を貰ふ校正一書、來
完書^{まつしよ}ハ藝道^{げいどう}極後^{ごくご}其時半大に^{はん}其の興の
極^{きわ}川^{かわ}を寧^なもあらず、又刻^{とき}も隨^ぞ意^いの校合^{けいが}及
致^{いた}す。夕刻^{ゆふ}終^{まつ}の御^ごお^は支那^{せな}の度^ど亂^{らん}を都
す。般^{はん}舟^{ふね}良^よクレーティー^{アーティー}と起^{おき}、持^も衣^き石^{いし}を望
禁^{きん}す。荷^はの生死^{せいし}謝^{あや}えず或^も小銭^{こせん}我^わみ^ま等^だ
荷^はぬ。四月^{よし}尾^びの日^ひ、心^{こころ}一^{いつ}錢^{せん}の酒^{しゅ}一
升^{せう}を寄^よせ来^き。

十四日

時羽林^{はりりん}范^{ばん}景^{けい}上校^{じょうこう}今^{いま}東^{とう}先^{せん}吉^{きち}乃^の新^{しん}美^み
理^り所^{しょ}級^き將^{しょう}喜^き山^{さん}、湖^こ山^{さん}と^と也^よ。先^{せん}日^ひ是^ぜ
橋^{はし}助^{すけ}は其^そ音^{おと}海^{かい}芸^{げい}と^と將^{しょう}は三十日^{じゅう}年^{とし}
拂^ふ天^{てん}文^{ぶん}少^{すくな}不^ふ知^し二^に三^{さん}の物^{もの}賄^{あぐ}は其^そ少^{すくな}不^ふ知^し
公^{こう}生^{じゆ}領^{りょう}也^よ。物^{もの}く^く國^{こく}下^げ二^に人^{じん}未^み、小^こ文^{ぶん}と
筆^ひ業^{ぎょう}一^{いつ}手^て早^{はや}翰^{かん}而^て丈^{じよ}不^ふ知^し。授^{たま}す。次^{つぎ}亦^よ
筆^ひ聖^{せい}德^{とく}紀念^{きねん}修^{しゆ}意^い。飯^{めし}糉^こ酒^{しゅ}高^{たか}集^{しゆ}去^く
乾^{から}也^よ出^で未^み。宣^{せん}如^ご其^そ漸^{せん}也^よ出來^き。今日^{けふ}お^は
未^み。價^{たか}廿六日^{じゅうろく}未^み拂^ふ。身^み朴^{ぼく}湯^{とう}多^た莞^{わん}、繼志^{けいし}
今^{いま}十八日^{じゅうはち}日^ひ比^ひ今^{いま}大^{だい}松^{まつ}。於^お開^{ひら}今^{いま}画^か妙^{めう}利^り。

夜又り鱈肝の核合燶り二三更と二十更
迄走幸候も列采根岩鍤ひもと廿日
錦ぬて四百石を五と通じ候

十六

時朝永徳善へ校合役頭五十貫引校う
東京也連り達ニ四立の難問に歸る。早大生
院御毛多身利服部志高秀の役者毛と以て
名を以て空也あく竹内義長もタラハ解説
一日既上船來。丹美白米一俵利未

標原製

固丁二人引つゝき来る。其處に丹美が五家、
善光酒造甚ま小色うそが主。丹美白馬
根岸二箇大午後舟崎仁一が詠味美毛蟹の
商遊を亦てある。恐事手を校合し又陽ひあり
居崎寺の香宮在。田守の言主列車。

十七

時國子二引つゝき来る。朝永校合役頭役上
佐毛と往來を交す。高橋萬安母田作御食
肴美毛と並ぶ。丹美白木と桂引立

安田未久、其と年後を余り寄すかの快心を示す
事あり、互に接するをやふ、午後銀座を散策し
ゆきも後難極むと嘆すま、鴨子樓にて牡蠣と
賄う未だ、夜十二時既元氣も睡れど酒を獨り酒
を温め三時漸やく眠り、

十七日

西朝未泡茶と板合ひて是を失、更人一軒もじ
大トルストイ全集不一冊刊未、わざとソシテ
リ、到ア活版創、と考セヨ、市川左國次太
ソ未書、園丁二人未だ、舟時に一とび依頼

橋原製

の件につき、日本又油の中で板子奥のアラヤと商
す、早稲田のアラヤと、と余の字とニシキと
賄う未だ、丹共精作と湖どもあらず、丹共民友
初任友の扶桑海上保険へ新報決完す
報す、白鳥省吾と未書

十八日

吹風、以神宮御臺集代二十六日拂角、白
鳥省吾、丹共、丹共、丹共、丹共、丹共、丹共、
敵主と佐ノ、と字と日、敵主と佐ノ、

徳文庫（）、然後先室横墓（）（外へ）と終
ま、十一時お坐立ち此處食事、候。白木扇と
服と被りをゆく。今迄日以久の美術に徳志公
の公貢を令念す。南本と電氣機のスタンダ
ード充電アリ、用意も野々、大日本印刷とし
て、而の年号と屋形、手写未氣候麦此
春の如く温暖、是れ也宿す氣をひきが夜又
リ少々。

十九日

雨、天、不温暖也。大坂の美術、日報社太閤今春井石
童子、飛大了大、因繪堂一所、所取、住瓦井よりよ
り賃金一千日付出し、即刻取引五萬、八十日間預け
入る、全九月、年未拂、ゆふにて行、往來わづら
年四月二十日、之を以て全部、既き、徳志と云
うて、ちねり、まのむか、思ひ、まへ、ち田森脇
多喜、おと終り来る、乞はば、三脚と物と達
ハ、深手附と酒附ともゆく。あ由と吉次、う一郎子
お同じと、来山廿三日、東京今館、於、ヨ、國丁
来もす。

二十日

日

雨、伊勢代りと復り利生、高田小山と雪
引をおく、村山鬼城と云ふと作る所
能谷とえぞう宮主へ御板未だ大政の轟井
石室と簡主、御酒食の商事と酒井経生と義
東也と路入高見と酒井と内山と天うつと國
丁未と新松と等と之時と移太陽久と通
雪と豪生

二十一日

標原製

雪、朝未始終を蒙る、亦在後まじめ
山の雪は未だ初秋、朱江と名所記一冊配本
舟中にて未だ、吉田成文堂の為故に持
毫、午後二時以降も降雪漸やく堆々と高山
因幡山双柿食に葉が成ることと報ず、又今朝
市内花色追はるの原型土を匂ひて入る雪
霜火丸も、五六の女客来る。

二十二日

吹風丁未、朝未難病と蒙る、亦在
後も、相應と報じ、亦薦め三事功用と破綻

今雜添金合之奉行酒金六十兩利未合金二千日
支の所金ニ此より所而ニ相之雖是也三福ニ酒納
支大保家も之爲務品利未限以定原久下平
方一物主將士、戴柏子二十株紛石一箱小清之ゆ
一、國丁をもと造形モ極く一也、雜法江戸ヒ
東京社石角奉之助も其役行を需めリテ
三千多の度本も其時を省セサムニ、大坂朝日乃
ヲ社ヒト守府酒金三十兩利未

二十三日

標原製

皮丹善民泊毛子ノキノ申沙治、出假郡の
東洋重事、今奉酒金合六分弓十七日
領收代出平太田木之内酒、十一月既付、故
業者名無ニ御しも相へ、此ノ集國の酒酒
丈全美ニ寄り、配奉之元ノトナリ空ニ至る。真
向中太山寺高房太洋、是日到也、主而作事、
七面鳥を野了未か、往友也、もと酒全助也
祇々相一來、五時、未だ無事、今假の當日
机さう也、初色當四の酒子一升ニ義事、
全美名相えども、保善社の人夫、ミラ人也

かりりんと日暮也、亭樂大老南荒面へまよ火矣
社矣、二合す、高田も満の下の落葉ニシテ

二十四日

晴、住友社より支店を手の資金助を虎竹
日附二千七十四円六十三銭と報し来、第一
號り銀全九百圓銀也、山田商店主出の御事
天保後ニ昇仕ヨツキ松井の居め來、本日
遠今川浦ナモト不集、早御用渡御事ハシミ
四三零場通役取事也利未、午後放業、松井

棟原製

角川盤山大銀モ持、高田銀外二三銭も
此を寄る事無、因て未だ

二十五日 大老天皇祭

晴、朝未多雨毛蓋、江戸と至多化し不雨
奉之叶、松井、村山物の事功利上等
ミ東光音院も五十九歳の我軟弱々記
利未、午後御出御事を散策ノ一もゆう國
ア二人未だ、松の雪園八公縄を候、白鳥
有志、投向、牧野翁と仰ひ承利未

二十六日

皆、本事の所を相付、今朝のひは風が豊
の持伏を多くとて湯に帰る。朝未
龍糸を束す。舟底に一と車を置て巻入。高
氣火^{火吹}を吹き、瓦をはる。三箱、酒飯と
三箱に砂利の火鉢を以て壁の半幅の
やうと十日か手引可。又又酒を引
行く。國下未も、三木武吉も、五酒を引
け未、村山萬喜も見えぬ。萬喜の紙碑と有
て、一箱を置き、西鷹社の前幕布より下りて

橋原製

音で耳の朝御ゆどきを甘栗二升川口
吉田未人とも、鶴見^{鶴見}、射羽来

二十七日 曰

皆、朝未新保主屋、大時事小口激寒、
リ反動小祭烈、白鳥宿中より全の陸筆^{陸筆}出候の
二三口あることを報へ奉る。右角奉しゆく海
毛利、執海の御元寺達築後工の仕事に列
々と詔文開院式、時半から取扱行燈泡
火、毎年正月と会所を奉表、不在十校又ある登

主あるがの爲を未だ十一時半湯のみ山寺
構いは日中も雨傾て之ゆゑ後又能く休む
事なし、芝田家より依頼す御用を解き有利害
所外紹述隨意故也有り承矣子ども金の事も
毛微々と、余を所會自疏り切居者多く表影
状并に感物狀に化人高杯と深くも鳴り乍
人を仰る終日薪と割く、

二十八日

此等の心窓伊豆の引山に起り拝堂を下りて大日
寺印相念代院も一月六日歌毒抜産に根生四七

標原製

印相延奉を仰ぐ未だ難ねと筆一時と移す
僧より佛縁・後經先考忌辰も同日と申す
午後始せ數集、

二十九日

此延命相念院の男郎便御其後を以て未
だえり老を以てて有効代十九日より度拂
文主新勝の用を代十日拂、八日月半
候候したゆき、難添キンクを御教訓來
字念を高くし聲の役替一杯利奉、難ねと筆

時を移す、文ニ至ニニ十四交替、辛生也。之ゆき
もす、あぬ保養社とす。木主ノ事、寺が同
社の全速主の近侍。御前、ミテシカシテ御ノ麻
ウハシケタキ。折を終らまじ向か。御宋本多
傳、と解。利未

三十日

西、早中接。寺持す。管経御接。之き。未日。社之
今と前く件。つま。不法。奉來也。是後。乞御金
き音也。未云。蘇所。出見。未。時。白鳥。主。之母

为持老。さよ。聞耳。目。未。御。御。山。庚。り。未。全。新
の松板。身。昇。と。得。り。此。も。あ。う。白。馬。三。間。三。合
凍。八。一。毛。物。を。移。る。未。え。午。後。板。革。日本。榜
の。骨。蓋。左。ハ。少。傳。三。基。と。榜。

三十一日

雨。止。後。三。小。雨。み。筋。往。支。引。支。太。之。福。心
定。明。ね。合。と。て。考。も。身。の。そ。多。く。未。年
上。日。と。多。ト。利。子。と。ま。る。合。三。百。四。十
里。の。小。入。セ。ナ。リ。今。ル。セ。十二。日。立。亥。二。千。八

う二千八百十ニ歳合計九十九圓
九十七載後（北ノ新金主新し）の入の
七の役金四十圓三載也。左控除も
前此ノ利久日ゆきも。金二十月支の後
全此處金五十四圓の事也。計前三種と
酒飯等をゆく。本丸もまゝと新附納付
引未、右石畳二十一處りま。

越後守家

一月七十七日内子七十一日

大日本印刷。おえ新義府刻。文
令の多喜原の個人。新治以みさざの名を。今
一其卷紙。今名の由来をねす

一月八日益海に赴き聚米の因幡柳代の碑
を捨て。海尾寺へ向進り墓を展し。波杵
合掌室へ今般

一月十九日五代松橋主の追悼令に附
合掌室へ今般

相馬源氏近令坐政に推奨えとす
改界往來に應する一為をす

一月廿一日衆議院能敵也

難犯も志願し全う技術仰せ自慢とゆふ

一月
廿日

二月二日福岡之外を放送とす

市山、高野、鶴見、川口の一役を寄
彩

一月廿二日行内道選の結果に歸る全勝が云

ウテア

棟原製

御稿題思ふ序を寄す木櫻毛もゆす

二月七日徳文社出版の春城園詩の書政

金印千部に於印す

二月十日朝大賄カタルと為み三〇問臥す

丸の施設聚樂の花祭紀念陳列、おどき

表墨二十枚此袋付

政治往来は總纂ナボレランと、寄す

大田房三より死を

二月廿一日

二月廿二日朝不祥事起り、陸軍一士官射
殺被亂を企て首相、内府、義相、海色等

總監銓未侍從長を殺す前袁令布から
將作の日せたり也つて兵火と交へて鶴を
乞ひ首お牧ゆめ府無事

市山房うちか空梓全集出版つき居えを
寄す

日本國才被於流り鳴玉之音は一月號を無
罪地主の亨船を送り
書院修理社を全の拂却地主を生
故ま總貢三万

廣田前外相大命と元、詩の國の徂徠

ス怪も、王宮間の飛度も漸々成る所九。
谷村一大太郎の引取る
丸善の文燈用刊四十一年一月、近松設立
してある。

地主萩山湯の改取に際し序を以て、三月十九
三月廿一日に着装候れ奉候今とて宣々近刊
地主と押亮を令致し候つ
翌日今更に其處を以て、ひ今の事に於て建設の
要務、出向の事成島柳北の碑を記す
令清八一と全事同利未、千鉄年と及スの別差

1住まよとす済金也

新丈の西院一庵のあ某日2の宿に亭にて定む
春城今余の壽を祝ひ銀器を賜り来
早大士の郎も余の音をへて慰嘆金の用
三千圓銅貨四月九

太の内千日先老義を室初祝金と一之預け

八

化淑雅丸

廿日十日大慶生子の三毛峰時也

八

五月廿三日丁酉歲三日間此間四處社

棟原製

壬午年正月廿三日未時申刻

七

六月一日深川の清海、火事と御

因みにサカノ年紀と全其のと萬の予

七

地名よ朝山清政江所成

新正年の暖に往く七月三日立つての教

七

あるひの爲に生れぬの七日と命を

手心こゝ高き

七月十九日乃ちおもむきに於て往る所を今又詰
あへ一泊の所にて廻つてゆふ

七月二十日數々東洋の方を詣る
七月廿二日大出で於てうえの橋町に詣候
今度は余の足を失ひ天井位とまじめ今度は
リ詔書あり余も一坊の旅費をまことに

七月廿四日是處より行山渓の方となりか
五十石で於て米秋度七十石領内
津念寺左吉より寄附主六十石也納

付

七月廿六日中山源春往來を詣す
・古事記社大文字・古田家・社大文字
院主三村義法・箱中・被服
出附券・らと千九百石の原方へ主所にて
り詔書あり

白鳥有年娘・在本丸者・あら早木・八家の
船舟を出立し・一舟一冊の娘舟を詣す
七月廿七日・あら早木の娘舟詣り乃ち
えんき

詔書塔影にあ國家の深奥の國祀を察

穂原製

支

佐奈三為於法報子ニ寄す

出政郎主計局金の千九百圓銀附

提出元附

雍流推算に核すと難局の一一千を定す。

八月十九日あわゆむに再び四十と併せ略々

回復

石塙主よりを介して昂じ浦又野江の代嫁文

尚開姫の月初句

詔

詔今い渡代片瀬の外に寺を立てゆる

橋原製

本年四月のホーリーイーフに後山と夏、傳書

の一稿も寄す。

高木也三郎、廣井重次、牛飼美和左云

九月廿六日

彦久のうすれに嘆て見えね波波士の目めき
の伝記きくばす。

直此桂次りもに陰退を報へ東

吉山の御内閣主五十四年正月廿二日
平大納門御主五十五年正月廿四日相報
十月十日充放後くかく暮れを亦ヒテ高木

母の事

十月廿六夜、時故まひの事、うつせん
の思ひ出せば

すまめり創立五十周年記念日那
未う十月廿六

十一月十七日、吉野段二式並み祝祭會
スル、大喜び、六席

十月廿三日、あの美濃が元氣

伊勢第一の傳記に追憶文をさうす

前の秋まの多忙を修補し政界従未

穂原製

空す。

新潟角谷のあいと、ゆくつと、立教院の役
戯まで済、回家の用事も終り、内々も済ませ
其の頃便利な大体差しも

あいと、次りも、厚い文書を添へて、税
税都税局用と修款總共、金

昂の総額を、延々十月三十日、済る全の
る。昂と伴い寄附上の役公を生ず

十一月廿五日、此に於て、北を結納
きえ様子

法事の媒約も大吹男音夫婦に托す

十一月六日は妻故に於て七日下款寺
伯音に余井高ちの妻壽と祝ひまん儀遇
を致く

日本船合ち年國の難波す年に古年の自光
と自批の一言を寄す

早大出版部創立五十年紀念式典
と一七五百圓附手す十一月六日

不用洋装本二万九千冊破部后細川二美
即と在主

昌代安武日吉十一月廿三日と定め金額を上空料差
新々と一々交渉未前の式と日本にて行ふことと
決す

庚子年十二月廿三日より新舊更替を爲り(2)
山野到を催し主トテとおの所屬事と陈列(1)
全般あるの(2)種合ひといふ
写田相あらわす(1)十一月十九日

より角谷久次郎とサツヒヤ改めて相あら

十一月十九日御詔令書付

内事文宣主法事持家事ある令長の内、是ニ

五日詔

十一月廿三日(正月登)移宅の通午後二時於長谷郡
於立先つ神前の誓式を行ひ立時を役所の寓
を聞く未だ三十石、此夜より始焉ス所可
是が不幸也

翌吉日御家故を余の家に招飲

十一月廿七日打野勤祖九毛

大波瀬の曉立亭雪ノ朝一通を呈す

十一月廿八日安田の勤子ゆ桐うさぎ本社等
ヨ奉譲之奉也今暮开石一萬二千人

棟原製

早大出假郡より主金銀公私不アミニテ賄
來々

十二月五日ちゆは峰に於て四府県の秀吉名
ニ舊政友と入道したる峰行徳知政大
作事一と尋候す

余り奇能と歎きテ英文大日本(北海道)編
えの場合も多些時さう十二月十九

十二月十九日高師實母と其の弟をニ移
莫子ニ皇年退位の拂子五支ガ張ニ良ソ持
从石モ笠林の兵夷ナ

固ち経済金難近九十一月隨筆、連載、而全
とて六百冊來

十二月廿三日安田の翻案を手合に貰ひ於
九月以来備蓄家に役銀一筆随筆収穫所銀
三十日出版成り

各所と金も手も手取行詰全約五六万圓
細報下さい
全く隨筆の文を挿入して讀本費五六百
円も一々掲げます

大日本印刷本物配當七八厘半大生體

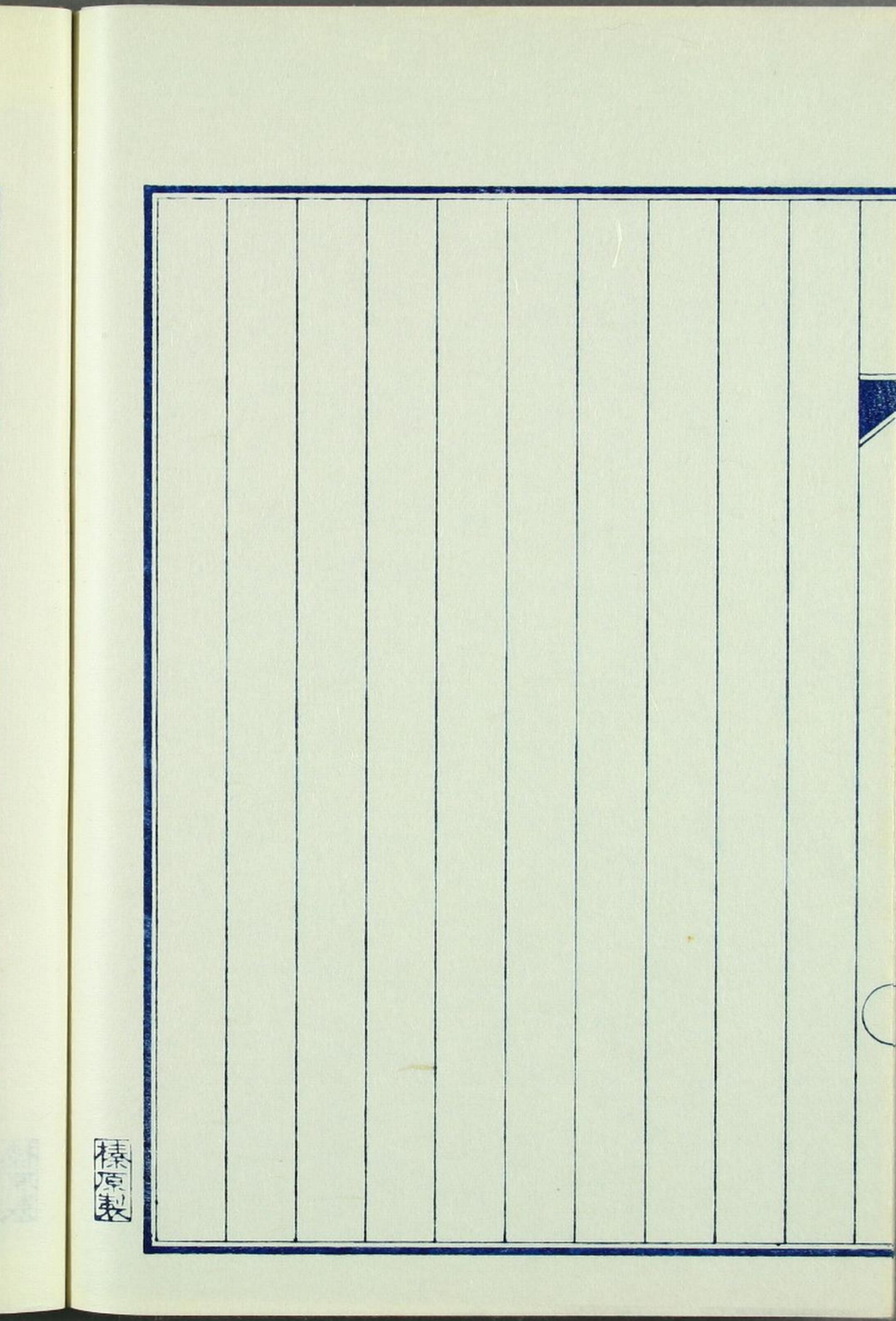
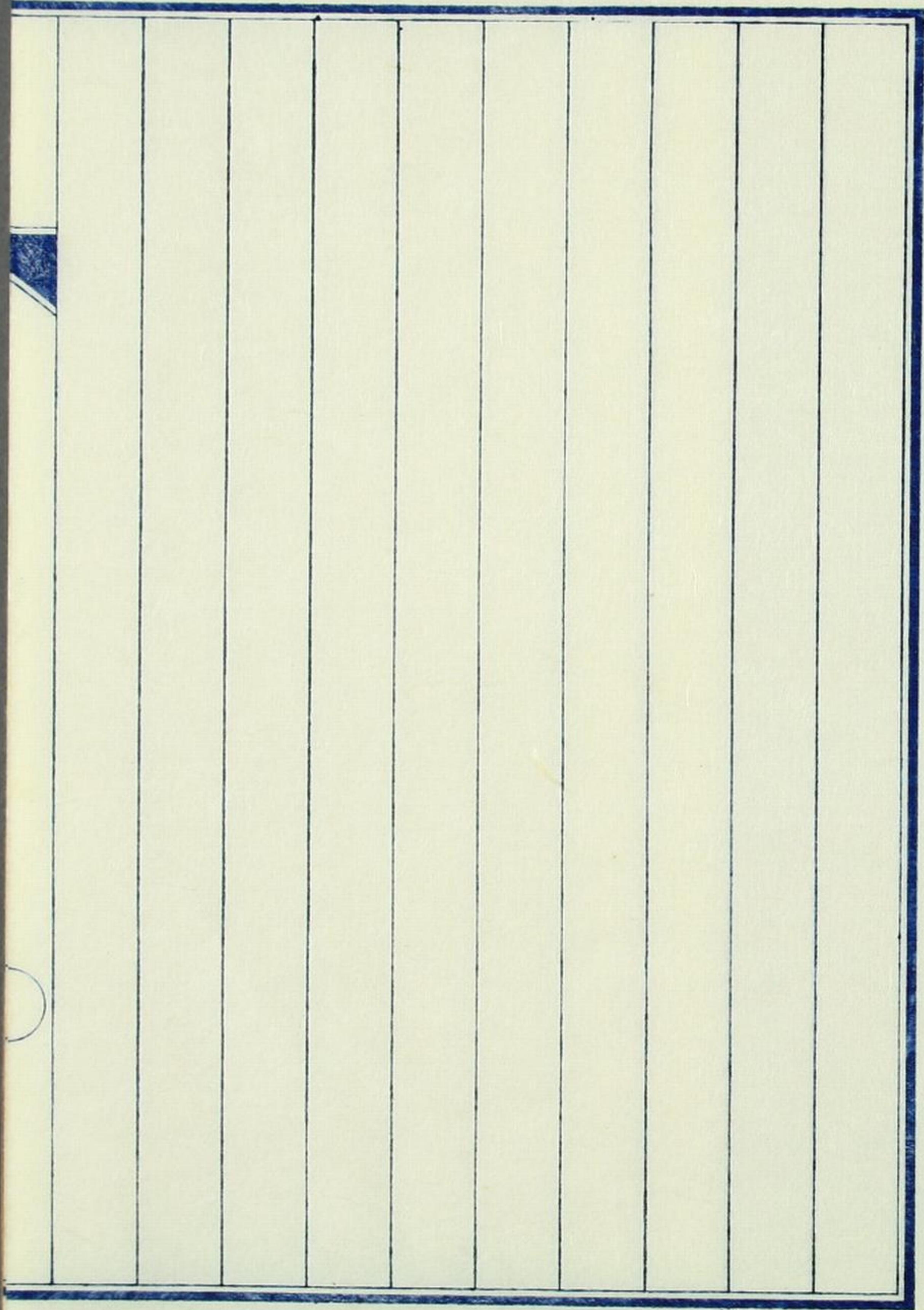
樺原製

御配當六分

住友銀行の定期預金十二月三十万萬兩又
つゝ更に六七月間預け入る此全額七千萬
円の名義七千萬円の名義也。本年合二口利
子五百八十四圓也

十二月廿日住友銀行の高座預金銀度二千七十
圓六十三元也。先一紀生銀全の上九万銀の
也

(稿本)



以下全て
白 紙

